

広島大学大学院
放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム
第3回短期フィールドワークを実施しました

平成 27 年 8 月 31 日から 9 月 4 日に、放射線災害を受けた現地で災害復興の現状を分野（放射線災害から生命を護る，放射能から環境を護る，放射能から人と社会を護る）を超えた視野で把握し，課題を見出すことを目的として，広島大学放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム短期フィールドワークを当プログラム学生，教職員，そして，京都大学・東京医科歯科大学・千葉大学のリーディングプログラム所属学生も参加し，合計 21 名で実施しました。

参加した学生や教員からは以下のコメントが寄せられ，参加者にとって，非常に有意義な学外学習機会となりました。

今回の短期フィールドワークでは，多方面から放射線災害を学び，現地の人たちと接することで，視野が大きく広がったと感じています。特に，飯館村立草野・飯樋・臼石小学校や友伸グランド仮設住宅訪問では，そこで生活する方々から震災当時の経験や現在の心配事などを伺い，机上では得ることができない経験ができました。このことから，人間同士の交流ややり取りが加わっている学びの場が一番心に響くと実感し，今後の研究の場でも，人とのつながりを大切にしていきたいと思いました。



（放射能社会復興コース 松本 千香）

本プログラムの学生は，10 月の入学後にまずショートフィールドビジット（SFV）として，放射線災害に関連する場所を訪問しています。今回の短期フィールドワークは，それに続いて，主にプログラムの各コースの 2 年生 7 名が参加しました。また，昨年より，他大学のリーディングプログラムにも呼びかけ，今回は千葉大学，東京医科歯科大学，京都大学からの 3 名の大学院生も加わりました。

短期フィールドワークでは，普段の学習では十分に経験できない震災現場での様々な実地研修を行っています。私は南相馬市の友伸応急仮設住宅での聞き取り調査を担当しました。英語と日本語と方言を駆使し，今後予定されている避難区域解除に対して，住民がどのように考えているかをつぶさにインタビューし，様々な話を伺うことができました。ま

た、相馬漁港の訪問では、港湾の復旧、試験操業の説明、そして魚種による放射線検査の実際について学びました。

毎日、研修終了後に全員でミーティングの時間をもうけましたが、学生には新しい見聞が加わり、内容の深い充実した討論が実施できました。学生の能力もさらに高まり、企画した私達スタッフにも意味のある研修が実施できたと考え、無事に終了できたことに感謝しています。

(広島大学大学院医歯薬保健学研究院 教授 浦辺 幸夫)



友伸応急仮設住宅での聞き取り



毎日の研修終了後のミーティング